

たぐみ

T A K U M I

No.010

平成 13年6月 ● 初夏号

信州名匠会

(題字：故 池田三四郎 前名誉会長)

伝統的木造建築の粋を集めた百万石の城塞 信州名匠会研修旅行「石川県の建築見学」

信州名匠会の2000年の研修旅行は、平成12年11月11・12日、29名が参加して挙行された。今回は加賀百万石の城下町、石川県金沢市を中心に訪ね、金沢城址公園をはじめ歴史的価値の高い建築や博物館、美術館を見学した。以下に、大規模な復元工事が進む金沢城址公園のようすをご紹介します。

金沢城址公園・五十間長屋復元工事現場にて



県産材を用い、伝統工法で復元

復元工事が進んでいるのは、金沢城址三の丸広場と二の丸広場の間にある菱櫓、橋爪門続櫓と五十間長屋。平成8年に城址が石川県に払い下げられたのを機に復元の構想が持ち上がったもので、明治14(1881)年の大火で焼失した建築を史料に基づき木造の伝統工法を用いて建設している。桧や松、杉、ヒバなど県産材を多用し、施工も県内業者が担当。城建築の経験をもつ京都の業者が制作した模型を元に工事を進めている。設計に際しては県の重要施策の一つであるバリアフリーにも配慮し、スロープや階段昇降機、エレベーターも設置される予定。

内堀に沿い、柱から菱形の「菱櫓」

五十間長屋の北端に位置する菱櫓は、その形状が特徴的。内堀の形に合わせて建物全体が菱形になるよう設計されており、柱の断面も平行四辺形。壁は雪の多い北陸地方独特の海鼠壁。屋根は鉛瓦葺で、天井板の下に不燃ボードを敷き、上には厚さ3cmのヒバの手割り板を敷きつめている。



構造は、木造軸組工法と土壁、貫を組み合わせた耐力壁によって構成し、部材の接点は接ぎ手や仕口を用いて緊結を図っている。極力伝統的な工法を使うとしているが、釘やボルトを使用する箇所もあり、見え隠れ部分には最低限の現代工法を用いるところも生じている。弛みなどの生じていた石垣は、部分的に解体、できる限り在来の戸室石を用いて積み直したが、解体中の調査で石垣の工法や修理の歴史的変遷など新たな発見もあった。

金沢城址公園内の菱櫓で軸組実寸模型を見学。解説に聞き入る参加者たち

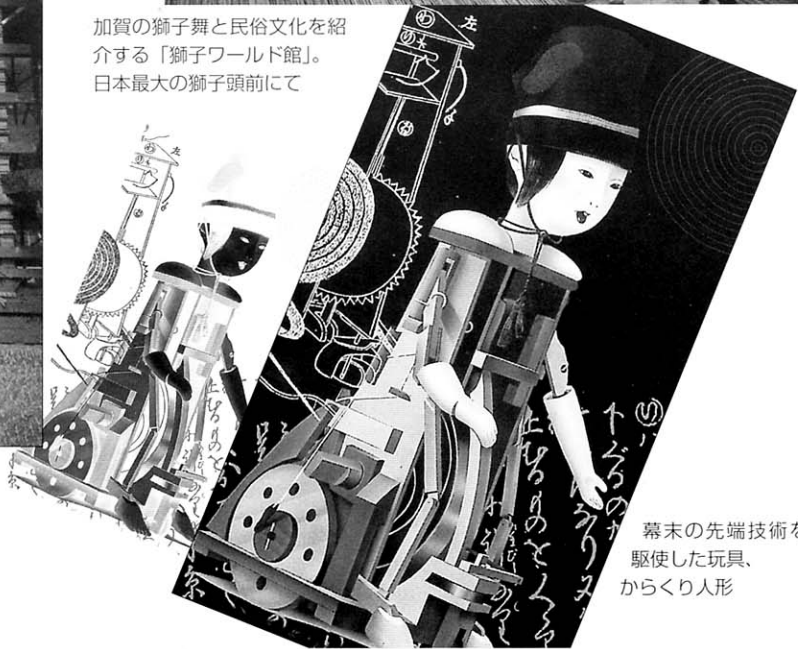
研修旅行スナツプ



金沢城址公園、五十間長屋の断面モデル



加賀の獅子舞と民俗文化を紹介する「獅子ワールド館」。日本最大の獅子頭前にて



幕末の先端技術を駆使した玩具、からくり人形



見て、触れて楽しく学んだ金沢市「からくり記念館」

○研修旅行日程○

11月11日(土)／信州中野IC→(上信越道・北陸道)→金沢東IC→金沢城址公園五十間長屋復元工事現場→兼六園(時雨亭・成翼閣)→兼見御亭(昼食)→石川県立歴史博物館→石川県立美術館→武家屋敷跡→ひがし茶屋界隈→ホテル(泊)

11月12日(日)／ホテル→大野からくり記念館→石川県銭屋五兵衛記念館→麒麟ビール工場(昼食)→獅子ワールド館→浅蔵五十吉美術館→小松IC→(北陸道・上信越道)→信州中野IC

2000年信州名匠会研修旅行

「石川県の建築見学」参加者名簿(氏名/所属の順)

赤塩政広/株本久、伊藤章/有アキプランニング、鎌田晴之/株本久、久保敏幸/株さつき苑、五明久昇/株五明、坂田守夫/坂田工業(株)、島田安雄/島田工務店 鈴木隆/ルームデザインハウス、高梨廣男/有高梨建設 高波和由/株キャステク、竹内公夫/株ダスキーターミニックスビホーム、永井竜雄/永正建築、西宮登喜男/有綿内瓦工業、藤沢和裕/株山二、堀誠/堀建築設計事務所、増田幸雄/匠建設(株)、宮川裕行/三ツ友建築企画 宮崎三雄/有アルファ測量設計、宮澤郁夫/宮澤建築 志田重忠/宮澤建築、堀幸一/宮澤建築、宮下恒夫/サンコー特機(株)、山田一忠/インテリア販売ヤマダ、山本耕平/長野サウナ販売(株)、佐藤満博/株二見屋、西澤嘉雄/株宮本忠長建築設計事務所、堀内久美子/株新建新聞社、小川明/株宮本忠長建築設計事務所、古川稚佳子/株宮本忠長建築設計事務所(計29名)

会員にきく

「たくみの仕事」Vol.3

「弟子が一人前になった時、
良い仕事に恵まれるような仕事を、今から」

島田工務店 島田安雄さん（左官業／須坂市）

profile●昭和14(1939)年、須坂市生まれ。長野市内で7年間、左官の修行をした後、27歳の時、現在地に独立。住宅の仕事をおもに手がける。一級左官技能士。職業訓練指導員。蔵の町並みを保存する志をもつ同業者の集まり「ザ・さかん 須高協同組合」の前理事・工事部長。28歳の長男が二代目として活躍している。

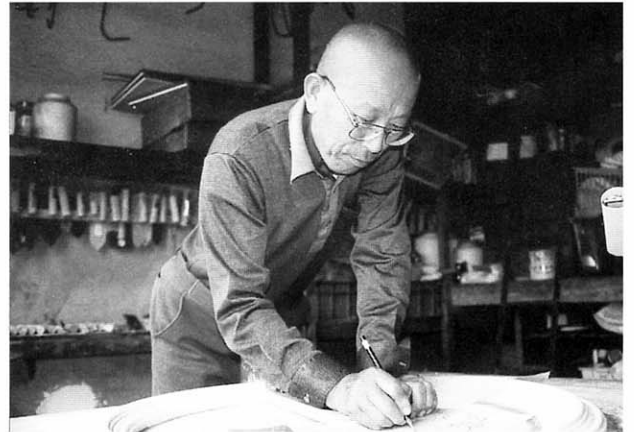
いい仕事をしなければ

昭和32(1957)年、左官業のおじに弟子入りしたので44年間、この道一筋です。左官業は、壁を塗る工程のほかに、飾りものやタイル貼りなど幅広く、建物も住宅から鉄筋まで間口が広いので、一人前になるには長い年月と数多くの経験が必要です。

幸い、28歳になる長男が工務店を継いでいますが、後継者に今後もきちんと仕事に来るような仕事ぶりを積み重ねることが先輩の大切な役目だと思います。その点、私が社会に出たころは日本経済の成長期で仕事はたくさんあり、「早ければよい。質はあまり問わない」という風潮でした。

いい仕事をする左官職人がいなければ、世間は左官という仕事を評価しませんから、数十年後の建替えの時、左官の職人に仕事は来ません。当然のことです。その間に技術は進み、世間の好みも変わって、例えば壁紙が開発され普及しました。40年前は住宅建築費用の10%くらいを左官関連が占めていましたが、今では1%。この厳しい現実を他人のせいにするわけにはいきません。こわいのは、悪い仕事をしたその職人に仕事来ないだけでなく、左官業全体が、業界として見放されてしまうことです。

中心飾りに取り組む



島田さんが取り組んだ蔵の開き戸の飾り（須坂市・牧野）。淡い水色の漆喰で波を描いている

須坂の町並みに「技と志」で貢献

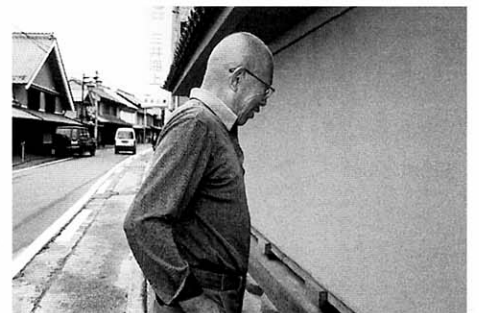
今、私が取り組んでいるのは「中心飾り」という飾りものです。洋間の天井中央につるす電灯を中心に直径60cmの同心円を石膏で作し、その中に動植物などをかたどった模様を描きます。模様はすべて、漆喰製です。あぶら粘土で作った型を石膏に入れて、^{めがた}雌型を作ります。その型に、現場で漆喰を流して仕上げます。やわらかいうちに、天井に漆喰で接着させます。明治期に受け入れた洋のデザイン感覚と伝統の和の技術が合体した一例です。こうした飾りものの技術は、今まで趣味で学び、磨いてきました。

須坂市では、江戸から明治、大正時代に建てられた蔵を保存活用する動きが10数年前から活発です。蔵と言えば塗り壁、左官の出番です。地元の左官仲間11人で「ザ・さかん」という会を作り、町並み保存の一翼を担っています。この「中心飾り」は、その活動の一つです。

ほかの業種のいたみも分かる職人に

異なる業種の職人が集まる「信州名匠会」の研修会は、毎回楽しみにしています。あわただしい現場を離れて、本音の話をゆっくり聞くことができるからです。井の中から飛び出して視野を広げられます。ほかの業種の悩みやいたみが分かるのは、職人としての大事な資質です。建築は数多い業種の総合ですからね。

最近はメーカーの人が講師になることもありますが、その業界や建材の本質的なことや歴史、伝統、将来像などを語っていただくと、よりためになると思います。名匠会に期待しています。



「町並みはみんなのもの。美しい町並みに貢献する職人には、仕事に来る。職人は美しい仕事ができなければならない」

会員にきく

「たくみの仕事」Vol.4

職人のプライドが身上

山中桐箱店 山中袈裟嗣さん

profile●昭和18(1943)年8月20日生まれ。16歳から父・五良さんごろうのもとで桐箱づくりを学ぶ。「印籠」「かぶせ」など各種の桐箱をはじめ、掛け軸を巻きつける「太巻き」や、茶道具、額縁にいなめなども手がける。箱は長さ3mと大きなものから、へその緒を入れるものまで幅広い。新嘗祭の献上箱でもある。

仕事場で桐材の説明をする山中さん

かんなくす一枚の世界

「印籠」型の桐箱は、ふたの部分を持って持ち上げても、はずれることはありません。きっちりと密閉するため、内部が真空状態になって、落ちないのです。

この精度を出すのはかんなくす一枚。ふたのはまる「仕口」のような部分を、小さなかなで少しずつ削って調節します。削ったかんなくすを透かしてみれば、向こう側が見えるほど。それほどの細かい作業が必要ですが、最近では2枚の板を貼り合わせて、この部分の段差を出す人もいます。そのやり方だと削ることができないため、微調整がうまくいかず、吸い付くようにふたが閉まるというわけにはいきませんね。

実(箱の部分)の方は真ん中の側面を少したわませ、ふたの方は逆に反らせます。こうすることで完全に密閉でき、ふたの真ん中だけを持ち上げても絶対にはずれることはありません。はずすときは、ふたの端を持ち、滑らせるようにします。

極端な例ですが、家が火事になったとしても、大切なものを桐箱に入れておいたなら、そのまま池に放り込めばいい。中まで水が入ってくることはないのです。

桐箱作りに使う「かな」は、大工さんが使うものよりも刃が寝ています。普通は刃の角度が7分5厘ですが、桐箱に使うものは6部5厘。寝ているほど、切れがよくなります。かなは一丁が2年ほどでだめになってしまう。この道具を作る人も今では少なくなって、東京まで注文を出しています。



「桐材は品質によって価格が10段階くらい違います。色合いや年輪が均質な素材は高額です。会津産の桐材を東京の間屋から仕入れます」

後継者がいないのが悩み

桐箱づくりは父について習いました。「職人に勉強は必要ない」と言われ、16歳のころから、まあ「やらされた」と言った方がいいかもしれませんが。父の実家は元々、飯山の仏壇屋。長男ではなかったので東京に出て建具の修行をし、桐箱づくりを覚えて、桐の産地・飯山のある長野県に戻ってきました。

もう亡くなりましたが、父が箱をつくっていたころは、おなじみのだんなさんが半日も遊びに来て、箱を注文していききました。お金はいくらかかってもいいからいいものをつくってくれというんですね。半日遊んでいくから仕事にかかるのは結局夜になる。でもお客さんの信頼を裏切れないし、職人のプライドもあって、中途半端なものはつくれない。今は生活のために「数もの」もつくりますが、父のころは

一切やっていませんでした。一人前に箱をつくれるようになるまで、10年かかりました。でも父にはまだかかないません。

後継者が育っていないのが今一番の悩みです。教えてくれと言ってくる人はときどきいるのですが、みんな報酬や待遇の話ばかり。普通の会社勤めとは違う。職人だから。職人を育てるのは難しいですよ。やる気があれば教えます。

技術を認めて

県の技能者表彰を父にも、という話があった。でも桐箱には業界がなく、仲間がいなくて組合がない。組合の推薦がなければ表彰を受けられないんですね。そういう制度のもとでは、実際、それほどの技術がなくても表彰される人もいますよ。

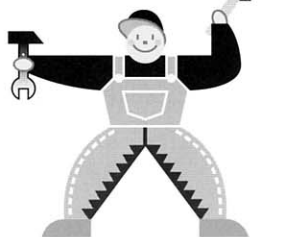
組合がなかったり所属していなくても、優れた職人であれば、名匠会が推薦するようなことがあっていいと思います。



桐専用の道具を使い、「かんなくす一枚」の世界に生きる

定例研修会●Report

平成12年12月～平成13年5月



【屋上緑化】



屋上緑化のほかシングル屋根材やアスファルト防水の改修工法も紹介された

平成12年12月20日

講師：田島ルーフィング(株)

／上田哲哉氏・川口直隆氏

参加者20名

建物への負荷を軽減し、 立ち枯れを防ぐ「Gウェイブ」

屋上緑化の利点は、「断熱性能の向上」「雨水の貯留」「二酸化炭素の吸収」「景観形成」など。新開発システム「Gウェイブ」は、特種形状のマットで少ない土壌でも最適な保水量を確保し、立ち枯れを防ぐもの。このシステムの導入により屋根面の荷重が削減され建物への負荷も軽減できる。また防水槽への根の進入は、ポリエチレン製耐根フィルムで防御可能。さらに、より少量の土壌での効果的な屋上緑化のために万年草のセダム類を使用する工法「Gウェイブ エコム」も開発。セダム類は乾燥や暑さ、寒さに強く、除草さえすればわずかな土壌で生育できるメンテナンスフリーの植物。この工法は「耐風性能」「耐土壌流出性能」「軽量化(40kg/m²)」により、勾配屋根への施工やローコスト化にも成功している。

会員の間から「ぜひ一度見学を」との声もあがった

【新年会】



13年1月24日●会場：長野市・さがみ●参加者33名

会員相互の親睦を図り、一年の抱負を語りあう毎年恒例の信州名匠会新年会が開催された。当日は宮本副会長も出席され、歓談の中、本年の仕事への抱負や決意を新たにされた。

【旧師団長官舎保存事業】

平成13年2月21日(保存事業VTR観賞会)参加者21名

明治期の匠たちの技術と情熱を伝える西洋建築

上越市の旧師団長官舎は1910年、陸軍第十三師団第三代師団長、長岡外史中将の長官舎として建てられたもの。工事費は当時13,300円。基礎はレンガ積みで、洋間は大壁、和室は真壁、屋根は洋小屋(キングポストトラス、一部和小屋)となっている。明治期に西洋建築の技術を見よう見真似で修得した匠たちが、創意工夫を重ねて和洋折衷の建物を造った時代のもの。鉄板を打ち出して模様を作ったものを天井に貼って塗装したり、回り縁を漆喰モールで飾るなど、当時の匠たちの意欲と努力の跡が至る所に見られる。復元工事の成った官舎は、一部現代の工法を用いているものの、時間と手間をかけた丁寧な仕事で仕上げられ、作庭との調和や当時を偲ばせる調度家具など精巧に仕上がっている。



【建具障子組子】



講議の後、中村氏の説明を聞きながら組子づくりに挑戦した

平成13年3月22日

講師：中村木工所 中村光敬氏

参加者25名

木の特製を知り、緻密な作業で仕上げる

組子にはやさしい雰囲気醸す「面取り組子」、埃がたまらないよう工夫した「塵返し組子」、曲線を生かした「曲げ組子」などがある。部材加工に際する原寸図おこしは、現在コンピュータを用いているが、昔はカミソリの刃でシナ合板に書く「白書き」だった。芯の太さが出てしまう鉛筆ではこなせない、非常に細密な作業である。

使用する木材は、中村木工所では乾燥後最低半年ねかせた材料を使い、狂いや割れに配慮している。乾燥は天然乾燥→人工乾燥→天然乾燥と工程を重ねるのがよい。木の特徴は材種や産地、木の部位により異なるので、木材によって適した使い方、加工が必要になる。研修会では、麻の葉模様の組子製作を実演した。

●信州名匠会新会員紹介 (平成13年 5月現在) <職種★氏名★会社名★住所★TEL>

- タイル、衛生陶器他住宅設備機器製造・販売★勝間康博★(株)INAX甲信支社長野営業所★長野市西尾張部1114-2★TEL026-252-6255
- 建築大工★塚田廣実★塚田住建★上水内郡戸隠村大字豊岡6296★TEL026-252-2816
- サイン計画★荒井徹★(有)デザインテック★長野市三輪1-5-19★TEL026-252-6389

●平成13年度信州名匠会総会 開催のおしらせ

本年度の信州名匠会総会を、下記の日程にて開催いたします。万事先お繰り合わせのうえ、ご出席くださいますようお願いいたします。

○日時/平成13年6月28日(木)

受付開始：15時/開会：15時30分/講演会：16時30分~/懇親会：17時45分～

○会場/長野市・メルパルクNAGANO 3F(長野駅より徒歩2分)

※当日は、藤森照信会長・吉田義男顧問(株)新建築社会長・馬場璋造顧問(建築情報システム研究所所長)も出席される予定です。なお、翌6月29日(金)には、ゴルフ大会を開催する予定です(8時～、信濃町・信濃ゴルフ倶楽部)。ふるってご参加ください。

【陶芸】



当日制作した作品は6月の総会で展示され、会長賞などが選ばれる

平成13年4月26日

講師：雪しろ窯 村越久子氏

参加者28名

楽しく土とたわむれ、イメージの成形に奮闘

当日は最初に花見会を催し、湯呑みや皿など雪しろ窯の陶芸作品を用いて温かいもてなしを受けた。参加者は一つ一つの作品を手にとりつづさに鑑賞し、各々の制作に向けたイメージづくりの参考とした。

制作は、粘土の乾燥度を均一にするための粗練り、菊練りから開始。単純に見えて難しい作業で、村越氏の見事な手さばきに感嘆の声があがった。この日の制作は、成形作業と釉薬の色指定まで。昨年に続き2回目の制作で、参加者の手つきや手順も慣れたようす。抹茶茶碗やぐい呑み、皿など思い描いたイメージに近づけようと奮闘した。この後、乾燥、素焼き、本焼きの工程を経て、約1ヵ月後に完成する予定。